

【自著紹介】 武内佳代『クィアする現代日本文学——ケア・動物・語り』

(青弓社 2023年1月)



本書は、フェミニズム・クィア批評やジェンダー批評の観点から、金井美恵子、村上春樹、田辺聖子、松浦理英子、多和田葉子という五人の作家たちの小説に新たな光を当てたものだ。全七章のうち三つの章をあてたのが、村上文学に関する考察である。と言うのも、従来フェミニズムやクィアという観点からは批判に晒されることが多かった村上の小説が、表面上はどうあれ、実のところ、フェミニズム・クィア批評やジェンダー批評の問題意識と極めて適合的であったためだ。それと同時に、村上の小説の数々が、「読む」という行為によってその姿を一変させる、まさに読者にとっては刺激的なポテンシャルを有していたからだとと言える。

そのことを否が応でも実感したのは、第2章の『ノルウェイの森』論を書いたときだった。本作は一見すると、「僕」が直子や緑といった女性たちとどのように関わったかを感傷的に回想する小説のように読める。実際、論文や評論の多くもそのように捉えてきた。しかし本章では、直子とレイコさんといった女性たち——つまり「僕」にとっての〈他者〉たち——が実にいろいろなことを語っている点に注目し、「僕」の視点では気づけていなかった、彼女たちのクィアな欲望を立ち上げた。それは、「僕」の恋愛物語を脱中心化する読解とも言い換えられるだろう。

次の第3章は、短編小説「レキシントンの幽霊」を、エイズ文学として読み直したものである。本作は、日本人作家の「僕」が、アメリカ滞在中だったころに交流したケイシーをめぐる出来事を回想するというものだ。一読してわかるように、そこには「エイズ」という言葉は一切出てこない。だが、ケイシーが語る言葉や、「僕」が見聞きした物事の数々にひとたび目を凝らしてみると、1980年代に始まるアメリカのエイズパニックの問題性がたちまちにして作品のそこかしこから浮かび上がることになる。

第4章では、短編小説の「七番目の男」を扱った。「男」の一人称の回想に見られる不可解な点を手掛かりに、トラウマ論と男性性研究の観点からその語りを読み直し、「男」が過去に受けたであろう暴力被害の問題を立ち上げていった。「男」の語りをトラウマティックなそれと見なし、親友の「K」に関する物語を大きく変更するところが読みどころとなっている。

以上は、村上春樹文学の表現の可能性を拓こうとした論者なりの格闘の軌跡にほかならない。一人でも多くの方にお読みいただき、村上文学を読むことの面白さを再確認していただければ幸いである。

【武内佳代（近現代日本文学）】